

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32633

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24659970

研究課題名(和文) 看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムの開発

研究課題名(英文) Evaluation of Reflection Program which promoted People Centered Care for Nurse

研究代表者

高橋 恵子 (TAKAHASHI, Keiko)

聖路加国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：90299991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムを構築する目的で、市民の健康相談の体験を用いたリフレクションプログラムを作成し、その実施と評価を行った。プログラム内容は、市民の健康相談活動の体験(1日)、個人ワーク、グループワークのステップで構成を計画した。研究協力者は看護師11名で、プログラム終了後に、プログラム評価に関する質問紙とグループインタビューを実施した。その結果、研究協力者の9割以上が市民の捉え方を知る機会、自分の捉え方のくせに気づく機会、市民とのコミュニケーションの仕方への変化があったと思うと回答し、プログラムの体験の意義も高く示された。

研究成果の概要(英文)：This paper reports on the planning and outcome of a Reflection Program aimed to promote nurses' People Centered Care. Program evaluation was based on questionnaires and group interview collected from the 11 program participants(nurses).

The program ran from December to January, 2014. There were three content areas (health concerns for people and individual work, group work) in the program. At the end of program, anonymous questionnaires and group interview were conducted and collected.

The results of questionnaires suggested the program was well received. In reference with program contents, more than 90 percent of participants were satisfied with the program. The positive results of questionnaires about the overall program suggested the program was well received as a pilot project.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：市民目線 リフレクション プログラム開発 臨床看護師 継続教育 看護教育 People Centered Care

1. 研究開始当初の背景

近年、市民が自分の健康問題に対する対応を、自ら納得いくように意思決定できる過程に付き合い、パートナーとしての看護職のあり方である People-Centered Care という市民とのパートナーのもとに行う新しいかたちの健康活動をめざした取り組みが行われている。しかし、医療現場では、今もなお、患者と専門家とのケアニーズの認識のずれによる医療者中心ケアの問題が提起されている。未だ看護職の課題や目標として、患者を市民 (=生活者) として捉え、そのような中、近年、効果的な学習を可能にする1つのツールとして看護職のリフレクションが注目され、経験からの学びを深めるといわれている。現在行われている看護職のリフレクションは、過去の複雑な臨床問題の事例を看護職が想起し、進めていく方法である。そのような場合、その事例を想起する段階から、個々の看護師の捉え方の違いで、問題である現象を看護師が問題と捉えず想起されない危険性がある。認識のずれを調査した諏訪部 (2007) が、看護師の患者への気づきを促進するためには、普段の看護師と患者の関係性における見方とは異なる視点を持つような機会を持つことが大切であると示唆している。

そこで、本研究では、看護師の「市民目線に立ったケア (市民目線に立ったコミュニケーションケア)」を育むために、普段の看護師と患者の関係性における見方とは異なる視点を持つ体験 (市民への健康相談) を活用し、自己および他者への気づきを促し、「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムを構築する。

<用語の定義>

1) 市民目線に立ったケア

本研究では、看護師と市民が互いに尊重し合い自立した個人として共同作業に寄与できるものをもち、双方が合意した市民中心の目標に向かって行うコミュニケーションと定義する。

2) リフレクション

本研究では、自己の成長を目的とした、自己の経験を振り返り、学びを深めるプロセスと定義する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、普通の状況下と異なる地域ケアの体験を用いて、看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムを作成し、実施と評価を行うものである。

- 1) プログラムの作成: 普段の状況下と異なる地域ケアの体験 (市民の健康相談) を用いて、看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムを作成する。
- 2) プログラムの評価: 普段の状況と異なる地域ケア (市民の健康相談) の体験を用

いて、看護師の「市民目線に立ったケア」を市民の健康相談を体験した看護師を育むリフレクションプログラムを評価する。

3. 研究方法

1) リフレクションプログラムの作成

Gibbs.G (1988) のリフレクションモデルをベースに、市民向けの相談活動体験を用いて、看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムを作成した。リフレクションの方略については、リフレクションに関する文献や資料、国内外の学会報告および Graham Gibbs (1988) が提供したリフレクションモデルをベースに、リフレクション方法に関する枠組みを検討した。

具体的には、文献検討に加え、研究者が継続的に実施してきたこれまでの研究データをまとめ直し、さらに2013年2月に看護系大学が運営している市民向けの健康相談活動の体験をした10名の看護師を対象に、その体験から、どのような気づきや学びがあったのか、また「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションへの刺激となりうる体験になりえるのか、インタビューを行い確認した。その結果、対象への捉え方や、自己のかわりにおける気づきや学びがインタビュー結果より得られた。しかし、同じ市民の健康相談活動の体験をした人との意見の共有をしたかったという声が挙げられた。さらに、プログラムの一般化を考えた場合、健康相談活動の体験を、ある特定の大学で提供する市民の健康相談の体験に限定してしまうことは、一般化可能性が低下してしまうため、どの市民健康相談でも適応可能なプログラムを作成する必要性が課題に残り、様々な地域で行われている健康相談でも適応可能なプログラムに修正した。

<看護師の「市民目線に立ったケア」を育むリフレクションプログラムの内容>

本プログラムは、市民健康相談の1日体験学習、体験後、リフレクションシートに記入 (個人ワーク) 個人ワーク後、グループによる体験の共有 (グループワーク) の3ステップとした。

市民健康相談の1日体験学習は、特に内容は限定せず、市民を対象にした健康相談とした。また、健康相談体験を終了後に行う、個人ワークのリフレクションシートは、2種類用意した。1つ目は、体験直後に、自分自身がどのような相談を受け、対象がどのようなことに気がかりをかかえ、その対応を行い気づいた一連の振り返りのプロセスを記載してもらった記入用紙である。2つ目は、体験学習後、改めて場面を振り返り、印象に残った場面を、プロセスレコードに記載し、自己の課題を書くものであった。

さらに、グループワークについては、どんな相談を受けたか、相談を聞いて、対象のことで改めて気づいたことは、その時、

自分の対応で改めて気づいたことは、日頃の看護実践に今回の気づきをどのように生かせるか、の4つのステップを基に「市民目線でコミュニケーションをするために看護職が必要なことは何か」についてのテーマで、健康相談を体験した者同士が、話し合い体験や意見を共有するものであった。グループワークは、計90分で構成し、はじめの60分間を1G4~5名程の小グループで話し合い、残りの30分間を参加者全員の大グループで共有するものであった。

2) プログラムの実施と評価

(1) 研究対象

対象者は、以下の条件を満たした看護師とした。

普段の状況下と異なる市民健康相談(以下の条件を満たす場所)の体験を行う予定にある者

- ・医療施設から独立している市民への健康相談の場である
 - ・一般市民を対象とする健康相談の場である
 - ・相談内容が健康に関するもので、病気の診断をされているものから、診断される前の何気ない疑問や心配、医療者に対する怒りなど幅広い相談内容が持ち込まれる健康相談の場である
- 現在、医療施設で看護サービスに従事している者
日ごろの看護サービスにあたり、本人自ら対象者の理解を深めたい、また、自分自身の成長を望んでいる者
上司や誰かの指示でなく、本人自らが研究協力に参加したいと望んだ者
看護師での臨床経験が2年以上有している者
研究協力に関して同意が得られた者

(2) 研究協力者の募集と選定

市民への健康相談活動の体験をする予定のある看護師が集まる研修会で、研修会の責任者の許可を得て、参加している看護師全体に向けて研究協力の依頼をアナウンスした。その後、協力をしてほしいという研究協力の候補者に、「研究へのご協力の説明」の文書と、口頭にて研究の主旨と内容についての説明をし、同意が得られた場合、研究協力の候補者と研究者の両者が、「同意書」に署名した上で、調査を開始した。

(3) データ収集方法

- ・データ収集期間
2013年12月から2014年1月
- ・データ収集場所
研究者が所属している施設内のプライバシーの確保できる部屋を提供した。

(4) プログラム実施とデータ収集の手順

1名の研究対象者に対して、予定して

いた市民健康相談体験後、個人でワークシートを記入し、市民(患者)と看護師のコミュニケーションにおけるグループディスカッションを実施し、その終了後にデータ収集を行った。

具体的には、研究対象者に対して、予定されている市民健康相談の体験前に、対象の属性データを収集した。研究対象者は、予定している市民健康相談の実施日を確認し、体験終了後、研究対象者は事前に研究者から手渡した記入シート(印象の残った場面のプロセスレコード用紙、相談体験の想起から気づきまでの記入用紙)を本人が記載する。その後、研究対象者は、看護の対象と看護師のコミュニケーションにおけるグループでの共有後、1週間内に、研究者がグループ面接調査と質問紙調査を実施した。研究者は、「グループ面接」「質問紙調査」の2つの方法より、研究対象者からデータ収集を行った。

(5) 分析方法

質問紙によるデータは、統計的に集計を行い、インタビューによる質的データは、類似する内容を分類した。分析の視点は、市民を対象にした健康相談の体験・個人ワーク・グループワークによるリフレクションにより、どのような市民(患者)とのコミュニケーションによる変化があったのかを分析した。また、今回の市民健康相談の体験と共有が看護師にとって市民目線のコミュニケーションを育むためのリフレクションを起こす刺激となりえたのかの視点で分析をした。さらに、市民を対象とした健康相談体験から、看護師がどのような時期に、リフレクションの刺激となったのかという視点で、プログラムを評価した。

(6) 倫理的配慮

研究参加者には、書面で研究内容および、責任の所在を明らかにし、研究への参加は、参加者の自由意志によるものであり、途中で辞退することも参加者の自由であること、データの内容は本研究以外の目的で使用されることはないことを説明した。質問を受け理解が得られた後、研究参加の同意書に署名を受けた。なお、本研究は、2013年度聖路加看護大学研究倫理審査委員会(承認番号:13-063)の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) 研究協力者の背景

女性9名、男性2名の計11名の看護師であった。年齢は、30代が3名、40代が6名、50代が1名、60代が1名の平均年齢は、43.5歳であった。看護職の資格は、11名中2名が保健師の資格も有していた。平均臨床経験年数は19.6年で、最短が8年から最長33年に分布していた。また、過去に市民への健康相談の経験の有無については、「経験あり」が5

名、「経験なし」が6名であった。現在の勤務先は、訪問看護ステーションが9名、病院が1名、クリニックが1名であった。

2) プログラム参加後の変化

研究協力者11名のプログラム参加後の変化は、以下の通りであった。

質問紙の結果では、図1~5に示すように、『市民の生活背景を知る機会』について、「非常にそう思う」7名(63.6%)、「まあそう思う」3名(27.3%)であった。また、『市民の捉え方を知る機会になった』について、「非常にそう思う」8名(72.7%)、「まあそう思う」3名(27.3%)であった。『自分の捉え方のくせに気づく機会になった』について「非常にそう思う」4名(36.4%)、「まあそう思う」6名(54.5%)であった。『市民とのコミュニケーションの仕方に変化があった』について「非常にそう思う」2名(18.2%)、「まあそう思う」9名(81.8%)であった。『市民とのコミュニケーションの振り返りを続けたい』について、「非常にそう思う」6名(54.5%)、「まあそう思う」5名(45.5%)であった。

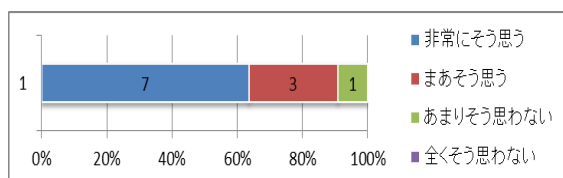


図1. 市民の生活背景を知る機会 (N=11)

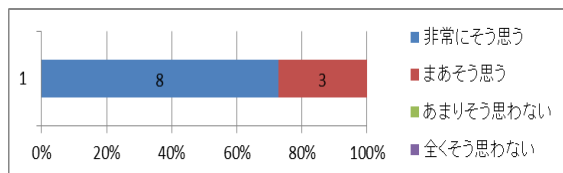


図2. 市民の捉え方を知る機会になった (N=11)

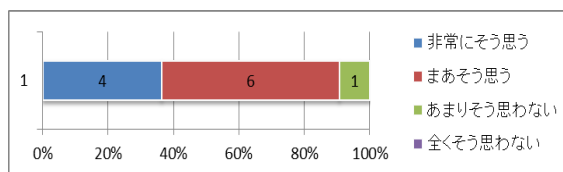


図3. 自分の捉え方のくせに気づく機会になった (N=11)

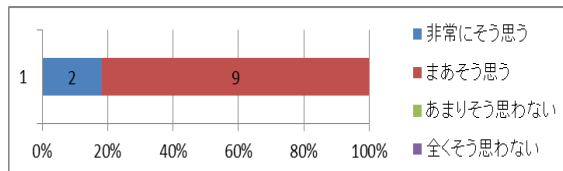


図4. 市民とのコミュニケーションの仕方に変化があった (N=11)

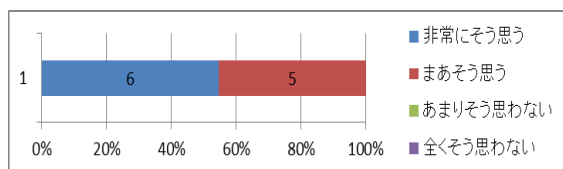


図5. 市民とのコミュニケーションの振り返りを続けたい (N=11)

インタビュー結果では、市民とのかかわりでの気づきや学びについては、【まずは関係作りが大切である】【まずは先入観を持たずに話を聴く姿勢が大事である】【対象の生活全体の広い視野を持ち関わる必要がある】【その人なりの健康の捉え方がある】【その人の言わんとしていることは何かに焦点を当てる】【対象と一緒に探す】【自分のかかわり方の特徴を知って対象に合わせていく】が挙げられた。

『自分の傾向に気づく機会になった』として【焦っている自分の傾向に気づいた】【真のニーズを聞き逃していた】【自分勝手な見方をしていた】【理由を確認せずひたすら傾聴していた】【指導的な偏った考え方をしていた】【対象の生活や時代背景をイメージできていなかった】といった内容が具体的に挙げられた。

これらの振り返りを通して、【自分の課題が明確になる】という体験をし、【ゆっくり傾聴している】【話の聴き方を自然に職場で伝える】など、振り返りの反省を日ごろのケアに生かしていると語ったものもいた。

3) プログラムの方法について

研究協力者11名のプログラムに関する評価は、以下の通りであった。

「体験回数」については、少なかった6名(54.5%)、適していた5名(45.5%)であった。ワークシートの適切性は、非常にそう思う2名(18.2%)、まあそう思う7名(63.6%)、「ディスカッションの時間」について、非常にそう思う5名(45.5%)、まあそう思う5名(45.5%)であった。

インタビュー結果においても、『振り返りのきっかけになったもの』については、【市民の健康相談の体験】【グループワークでの他者との共有】【プロセスレコードに書くという行為】が語られた。特に、グループワークについては、すごく良かったと、気づきや学びのきっかけになっていると語られていた。また、管理者の立場に立たない職場でない環境であることでの振り返りやすさが語られた。

4) プログラムの全体の評価

研究協力者11名のプログラムに関する評価は、以下の通りであった。

「コミュニケーション方法への気づきを促したもの」(複数回答可)について、健康相談体験が7名、個人ワーク4名、グループワークが7名であった。

「プログラム体験の意義」については、非常にそう思う11名(100%)と全員が回答した。「プログラムへの満足」については、非常にそう思う6名(54.5%)、まあそう思う5名(45.5%)であった。「日常の看護への役立ち」については、非常にそう思う9名

(81.8%)、まあそう思う 2 名(18.2%)であった。

5) 限界と今後の課題

11名の研究協力者を対象に、看護師の「市民目線に立ったケア(市民目線に立ったコミュニケーションケア)」を育むリフレクシオンプログラムを実施し、質問紙調査とインタビュー調査を基に評価した。その結果、「市民の生活背景を知る機会になった」「市民の捉え方を知る機会になった」「自分の捉え方のくせに気づく機会になった」「市民とのコミュニケーションの仕方に変化があった」の項目に、思う(非常に思う～まあ思う)と回答したものが9割以上であり、また、プログラム体験の意義も高く示された。特に、市民目線の気づきを促したものとして、健康相談体験と同時に、その後のグループワークによる他者との意見の共有が挙げられた。その結果から、おおむね評価できるプログラムではないかと考える。しかし、健康相談の体験回数が少ないと回答した者が、協力者の半数を占めていたこと、市民の生活背景を知る機会をあまり思われなかったものが、若干1名であったがいたこと、また、研究デザインにおいてもプログラムを評価できる十分な研究対象者数や、適切な研究デザインではなかったことから、今後も引き続きプログラムの精錬に向けて評価の継続が必要であると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

- 1) 高橋恵子, 市民を対象にした健康相談体験による臨床看護師の気づき, 第 17 回 聖路加看護学会学術大会, 2012 年 9 月 22 日, 聖路加看護大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

8. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋恵子(TAKAHASHI Keiko)
聖路加国際大学・看護学部・准教授
研究者番号: 90299991

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし